

第149回 岡山外科会

日時：平成14年10月27日(日)10:00～

場所：倉敷リハビリテーション病院リハビリテーションセンター

会長：藤原 紘 郎

(平成14年11月14日受稿)

1. 定位脳手術後、症状の進行に伴い視床下核電気刺激療法を施行したパーキンソン症例についての検討

岡山大学脳神経外科 和出 泰典 上利 崇 富田 享
大本 堯史

当科において、視床破壊術や淡蒼球内節破壊術を施行した後、症状の悪化に伴い、視床下核電気刺激療法(STN-DBS)を施行したパーキンソン病症例7名について検討した。両側に凝固術を施行することによって、発語障害や知能障害等の合併症発生の危険率は大幅に上昇するが、

STN-DBSはそれらの合併症を来たすことなく、安全性、調節性に優れた治療法であることを示した。また、効果的な電気刺激により、L-dopa内服量を減量できる場合があることを示した。

2. A型大動脈解離に対する治療戦略

心臓病センター榊原病院心臓血管外科 宮原 義典 畑 隆 登 津島 正義
松本 三明 吉鷹 秀範 村田 宏
佐名川有美 大谷 悟 山本 剛
鶴垣 伸也 佐藤 太祐 榊原 宣
榊原 敬

当院においてこの20ヶ月間でStanford A型大動脈解離27症例に外科的治療を行った。原則として可及的にtearを含む大動脈の人工血管置換を行った。脳保護は弓部分枝に解離が及ぶ場合は逆行性脳灌流を用いた。上行置換

(部分弓部置換を含む)を15例に、上行弓部全置換12例に行った(Bentall手術4例)。術後経過は、2例を肺炎及び脳出血で失ったが、その他25例は全例独歩退院となった。

3. 非特異的術後経過を示した大動脈炎症候群の1例

岡山大学大学院医歯学総合研究科心臓血管外科 小谷 恭弘 大崎 悟 森本 徹
高垣 昌巳 藤田 康文 末澤 孝徳
佐野 俊二

症例は33歳の女性で15才時より大動脈炎症候群を指摘されていた。妊娠を機に指摘された大動脈弁逆流に対し大動脈弁置換術を施行した。4年後に突然呼吸困難、前

胸部痛が出現し、精査の結果上行大動脈仮性瘤と判明した。準緊急的に手術を施行した。仮性瘤との交通孔は前回手術時の大動脈切開線に位置しており、フェルトを用

いて直接縫合した。また、瘤は右房へも穿破しており、直接縫合した。大動脈炎症候群手術例に関しては、こう

いった合併症を常に念頭において診療にあたるのが肝心である。

4. 脾腫瘍の1例

倉敷中央病院外科

症例は47歳女性、主訴は左側腹部痛。2001年10月頃より歩行時主訴あり。2002年になりやや疼痛増強したため、近医を受診、X線撮影にて腹部に石灰化病変が認められ、5月精査目的で当院消化器内科に入院。CT、MRI、

平田 義弘 小笠原敬三

ERCP、Ga シンチ、腹部血管造影にて脾腫瘍と診断され外科転科し脾臓摘除術を施行、脾血管肉腫と診断された。脾血管肉腫は極めて稀で、予後不良であり、今後も厳重な経過観察が必要と思われる。

5. 当院における外傷性脾損傷の検討

岡山赤十字病院外科

今回、我々は昭和63年より現在まで当院にて経験した外傷性脾損傷15例に対し、その損傷形態・合併症・診断・治療・待機時間・輸血量・予後の面から検討を加えた。さらに1例としてTAE施行にて止血・治癒できた遅発

市原周治 平井隆二 野上智弘
久保雅俊 高木章司 池田英二
森山重治 辻尚志 古谷四郎
名和清人

性脾損傷の症例を提示する。輸液・輸血によって血圧コントロール良好な症例は、まずTAEの実施を優先すべきであると思われた。

6. 特異な経過をとった異物性膿瘍の1例

川崎医科大学消化器外科

【患者】81歳男性【主訴】心窩部痛【既往歴】40年前胃癌のために幽門側胃切除施行されBillroth IIで再建【現病歴】平成14年1月から心窩部痛が出現した。6月に当院外来にて精査施行したところ左横隔膜窩に径8cm大の腫瘤を認め、精査加療のため7月18日入院となった。【経過】入院後しばらくして発熱が出現し、腹部CTにて腫瘤と下行結腸との交通を認めた。9月25日腫瘤摘出術施

池田正治 木元正利 三上佳子
山村真弘 久保添忠彦 浦上淳
吉田和弘 山下和城 林次郎
竹尾智行 角田司

行した。腫瘤は周囲と強固に癒着しており、脾臓、脾尾部、下行結腸の一部を合併切除した。腫瘤は下行結腸と交通していた。腫瘤内容は遺残ガーゼで、その一部は結腸内に脱出していた。【結語】腹腔内異物は診断に苦慮することが多い。また稀に腸管内に穿破して重症感染症をきたす恐れがあるので注意が必要である。

7. 血性乳頭分泌に対し乳房 dynamic MRI が診断に有用であった2例

川崎医科大学乳腺甲状腺外科

血性乳頭分泌症例の多くは触診、超音波、マンモグラフィで確固たる所見を認めない。分泌物捺印細胞診は感

池田雅彦 廣納麻衣 大久保澄子
山本裕 宇田川潔 中島一毅
田中克浩 紅林淳一 園尾博司

度が低く有用とは言えず、通常分泌物CEA測定や乳管造影がなされるがmicrodochectomyを行わない限り確

定診断は困難である。我々は血性乳頭分泌症例に対して病変の存在診断、良悪性診断、広がり診断を目的に、乳癌に対して感度、特異度ともに優れた乳房 dynamic MRI

を応用している。これが診断の決め手となった乳癌症例を2例概説する。

8. 超音波内視鏡検査が治療方針決定に有用であった食道粘膜下腫瘍の2例

岡山大学大学院医歯学総合研究科消化器・腫瘍外科

佐藤胃腸科外科病院

田辺俊介 植本良夫 谷口信将
小林正彦 白川靖博 山辻知樹
磯崎博司 田中紀章
佐藤克明

今回我々は、食道粘膜筋板由来と固有筋層由来の、2例の筋原性食道粘膜下腫瘍について、術前超音波内視鏡検査が腫瘍の発生母地の診断および治療方針決定に有用

であったので、この2例の診断、治療、経過について報告する。

9. 当科における食道癌術後遠隔成績の向上

岡山大学大学院医歯学総合研究科消化器・腫瘍外科

食道癌切除術後遠隔成績の推移を供覧し、その背景因子について検討した。T4あるいはN4症例においても、放射線・化学療法の併用等にて、根治切除が可能となる

谷口信将 植本良夫 田辺俊介
小林正彦 白川靖博 山辻知樹
磯崎博司 田中紀章

症例がみられた。切除術式のみならず、新たな補助療法の進歩により、今後さらなる治療成績の向上が期待される。

10. 経過中自然縮小傾向を示した肺扁平上皮癌の1症例

岡山済生会総合病院外科

玉野三井病院内科

症例は63歳男性。平成13年7月の健診にて胸部X線異常陰影を指摘され、平成13年11月と翌年2月結節影縮小傾向認め、経過観察されていたが、同年5月結節影の増大が見られ、当院紹介入院となった。画像以外に検査上

渡辺敏之 片岡正文 児島亨
大原利憲
安達光芳

異常は特に認めず、癌の可能性も否定できず、手術を行った。術後病理検査にて、低分化扁平上皮癌と診断された。自然縮小傾向を示したからといって、悪性腫瘍の可能性は否定できず、注意深い観察が必要と考えられた。

11. 縦隔リンパ節転移に対して CPT-11/CDDP が奏効した胃癌の1例

玉野市立玉野市民病院外科

進行胃癌に対し胃全摘術を施行後、CEAが増加し腹腔内リンパ節転移を認めたためPMCを開始しPRが得られた。その後CEAが再増加し縦隔リンパ節転移を認めたため少量CPT-11/CDDPを開始したところ、縦隔リン

須田学 末久弘 池田敏夫

パ節は著明に縮小しCEAは低下した。PMC、少量CPT-11/CDDP共に副作用は少なくリンパ節転移に対して奏効した。QOLを損なわず外来での投与が可能であり大変有用であった。

12. 血胸で発症した骨巨細胞腫肺転移の1例

川崎医科大学胸部心臓血管外科

湯川 拓郎 宍戸 英俊 森田 一郎
田淵 篤 石田 敦久 濱中 莊平
正木 久男 久保 裕司 三上 佳子
種本 和雄

今回我々は血胸にて発症した骨巨細胞腫肺転移の1例を経験したので、文献的考察を加え報告する。症例は20歳男性。15歳・16歳時に頸椎巨細胞腫の手術歴あり、特に誘因なく胸部痛、呼吸困難、動悸が出現した。胸部X

線では右血胸を認め、胸部CTでは両肺野に結節影を認めた。頸椎に局所再発の所見は認めなかった。治療は両側開胸腫瘍切除術を施行し、組織診断では骨巨細胞腫肺転移であった。術後経過は良好である。

13. 肺 MALT リンパ腫の1例

国立病院岡山医療センター呼吸器外科

大谷 真二 河合 俊典 東 良平

肺 MALT リンパ腫の1例を経験したので報告する。症例は50歳、女性、主訴は胸部異常陰影。気管支鏡下肺生検では診断を得られなかったため胸腔鏡下肺生検を行い low-grade B-cell lymphoma of MALT type と診断

した。治療は右肺上中葉切除術を行った。肺 MALT リンパ腫は比較的稀な疾患であるが、限局性病変については手術療法により切除を行うことが多く、治癒切除が行われれば予後は良好である。

14. 肺原発 MALT リンパ腫の1例

岡山赤十字病院外科

野上 智弘 森山 重治 市原 周治
久保 雅俊 高木 章司 池田 英二
平井 隆二 辻 尚志 古谷 四郎
名和 清人
國友 忠義

肺原発 MALT リンパ腫は節外性リンパ腫の中では、まれな疾患とされているが、その報告は年々増加している。今回、我々は術後に病理診断を得た肺 MALT リンパ腫の1例を経験したので報告する。症例は72歳の女性で、検診にて、胸部異常陰影を指摘され、右肺のS⁴に腫

瘍を指摘され、等院紹介、胸腔鏡下右中葉切除術+ND2aを施行。肺癌取り扱い規約に準じると、s-T₂N₀ M₀stage_aであったが、術後の病理診断で肺 MALT リンパ腫と診断された。

15. 回腸 MALT リンパ腫の1例

倉敷中央病院外科

國末 充央 小笠原 敬三

症例71歳、女性。1999年近医にてCF施行され、回腸末端の糜爛を認めたため経過観察されていた。2001.11.8に施行されたCF下生検の結果、MALT リンパ腫と診断され、2002.1.23手術目的で当科紹介入院となった。MALT リンパ腫は、低悪性度B細胞性リンパ腫の一群で、

Centorocyte-like cells (CCL) の増殖と lymphoepithelial lesion (LEL) の形成を特徴とし、免疫学的検索ではこれらのリンパ腫細胞でCD20が陽性でCD5、CD10は陰性である。

16. 診断, 治療に難渋した大動脈弁狭窄症と盲腸 Angiodysplasia の合併 (Heyde 症候群) の 1 例

川崎医科大学消化器外科 磯部 涼 山下和城 池田正治
山村真弘 久保添忠彦 吉田和弘
浦上 淳 木元正利 角田 司

本邦 7 例目の Heyde 症候群を経験した。症例は 69 歳、女性で主訴は原因不明の下血。繰り返す下血に対して平成 11 年 4 月に盲腸に血管異形成が確認された。5 月同部の切除目的で入院した。術前検査で手術適応を有する大

動脈弁狭窄を認めた。7 月 19 日 AVR と回盲部切除術の一期的手術を予定したが AVR 後の循環動態不良で二期的手術とした。AVR 後 30 日目に下血が再発し準緊急的に回盲部切除術を施行した。その後の経過は良好である。

17. 大腸多発癌を合併した Peutz-Jeghers 症候群の 1 例

金田病院外科 三村卓司 金田道弘 松本 柱

症例は 45 歳男性。腹満感、腹痛にて来院。四肢末端に色素斑を認め、CT にて大腸癌、小腸ポリープを認めた。大腸癌合併の Peutz-Jeghers 症候群と診断し手術を行っ

た。開腹所見では 2 箇所の大腸癌と、3 箇所の腸重積を認めた。本疾患は原因遺伝子が LKB1 と特定され、自験例も遺伝子解析中である。

18. 食道未分化癌の 2 例

岡山大学大学院医歯学総合研究科腫瘍・胸部外科

鈴木宏光 村上正和 佃 和憲
太田徹哉 内藤 稔 土井原博義
清水信義

食道未分化癌は全食道癌の 0.4~7.6% と報告されている。食道未分化癌の 2 例を経験したので報告する。

【症例 1】放射線・化学療法を施行し主病巣には著効を示したが、多発肝転移にて死亡。

【症例 2】リンパ節再発に対し化学療法が著効したと考

えられた。

進行症例に対し、化学療法を中心とした科学・放射線療法を行うべきだと思われた。再発に対しても化学療法を施行することによって QOL を改善したと思われた。

19. 当科における胃消化管悪性リンパ腫の検討

岡山大学附属病院腫瘍・胸部外科

青景圭樹 村上正和 佃 和憲
太田徹哉 内藤 稔 土井原博義
安藤陽夫 清水信義

消化管悪性リンパ腫 6 例のうち胃原発が 5 例、十二指腸が 1 例。Iugano 分類では stage 特が 3 例、stage Ⅲが 2 例、stage Ⅳが 1 例であった。1 例が化学療法中小腸穿孔で死亡している。腫瘍が消化管の全層に存在する場

合は、化学療法が効くと腫瘍が壊死し、穿孔をきたす可能性が高く、穿孔時には全身状態が悪いので致死率が高い。術前検査による病変の確実な把握と適切な staging をすることが大切と思われた。

20. 内頸静脈を用いて門脈再建を行った胆管癌の1例

岡山大学大学院医歯学総合研究科消化器・腫瘍外科

石川 隆	八木 孝仁	稲垣 優
貞森 裕	松田 浩明	松川 啓義
尾山 貴徳	村田 宏	岡 哲弘
黒瀬 洋平	松岡 順治	田中 紀章

内頸静脈を用いて門脈再建を行った胆管癌症例の手術手技を供覧すると共に、内頸静脈グラフトの有用性について検討した。症例は74歳の女性で、門脈内腫瘍栓を認める胆管癌で、門脈切除長は7cmにおよんだ。門脈再建

に際し、張力による吻合部の変形を回避し有効な定常流を得るためには、太さ、長さの合致したグラフトを使用することが肝要であり、内頸静脈グラフトはこのような広範囲の門脈切除症例において、有用であると考えられる。

21. 肝部下大静脈原発平滑筋肉腫の1切除例

— 下大静脈合併切除・人工血管置換を伴う拡大右葉切除 —

岡山大学大学院医歯学総合研究科消化器・腫瘍外科

村田 宏	八木 孝仁	稲垣 優
貞森 裕	石川 隆	松川 啓義
松田 浩明	尾山 貴徳	岡 哲弘
黒瀬 洋平	松岡 順治	田中 紀章

下大静脈原発平滑筋肉腫は希な疾患で、診断時には遠隔転移が多く、術後再発のため予後不良な疾患と言われていたが、今日、外科的に完全切除することによる予後の向上が報告されてきており、血行再建や他臓器合併切

除を含めて積極的に外科的切除を考慮すべきであると言われていた。今回、我々は本疾患に対して下大静脈合併切除・人工血管置換術を伴う拡大肝右葉切除術を一例経験したのでここに報告する。

22. 右葉グラフトを用いた生体肝移植に対する肝静脈再建術

岡山大学大学院医歯学総合研究科消化器・腫瘍外科

尾山 貴徳	八木 孝仁	稲垣 優
貞森 裕	石川 隆	松川 啓義
松田 浩明	村田 弘	岡 哲弘
黒瀬 洋平	松岡 順治	田中 紀章

1996年8月から2002年6月まで53例の生体肝移植を施行し、粗生存率86.8%である。成人39例中33例に右葉グラフトを用いた。内28例は中肝静脈分枝の再建をせず、6例に中肝静脈還流障害を認め、1例がこれの関与を疑

う進行性肝壊死で死亡。再建施行は5例で、中肝静脈・右肝静脈再建が1例、V8再建が4例で現在までトラブルはない。現在V8は可能な限り再建、V5は術中還流障害を認めれば再建の方針である。

23. 副神経損傷に対する遊離神経移植による再建

岡山大学形成再建外科

大西 文夫	難波 祐三郎	筒井 哲也
伊藤 聖子	松本 洋	月野 暁彦
寺戸 通久	柳林 聡	光 嶋 勲

副神経損傷に対し、早期に神経移植による再建を行った2例を呈示した。副神経損傷の原因は腫瘍切除に伴うものとリンパ節生検によるものが多くを占める。支配筋

に萎縮が進んでからでは満足な機能回復が得られない為、神経再建は可能な限り早期に行うべきである。

24. PIP 関節側副靱帯損傷の手術的治療

岡山済生会総合病院整形外科

兒玉昌之 今谷潤也 林 正典
長野博志 寺尾元延 榎崎慎二
守都義明

【対象と方法】当科にて手術を行った PIP 側副靱帯損傷34例38関節を調査検討した。術前評価はストレス X 線撮影による tilting angle を測定し、臨床成績は河野らの成績判定基準を用いた。【結果】tilting angle は15°~45°

であり全例に側副靱帯損傷を認めた。臨床成績は優・良が32関節で可・不可は6関節であった。【結語】PIP 側副靱帯損傷を手術的に治療し良好な成績を得た。

25. 非定型抗酸菌による手指屈筋腱鞘炎の1例

岡山労災病院整形外科

宮崎健洋 田中裕三 正岡俊二
米田泰史 花川志郎

左中指屈筋腱鞘に発症した非定型抗酸菌感染症を経験した。症例は49歳女性。2000年10月頃、左中指の腫脹出現し、12月4日当科初診。MRI で屈筋腱周囲の滑膜肥厚を認め、滑膜切除術を実施する。DNA-DNA hybridiza-

tionにて *Mycobacteriu marinum* が同定され、MINO, REP による化学療法を行い症状軽快した。難治性の手の腱鞘炎の診断においては本症を考慮する必要がある。

26. 上腕骨外科頸骨折に対する創外固定の使用経験

水島中央病院整形外科

茂山幸雄 藤原紘郎 井上 周
前原 孝 寺元秀文 光吉五朗

高齢者の上腕骨外科頸骨折に対して当科で創外固定にて治療を行った9例10肢について報告する。手術時年齢は61から85歳。全例骨癒合後、平均5.2週で抜釘を行った。肩関節可動域と疼痛ともに満足のいく臨床成績を示した。

高齢者の上腕骨頭部は骨密度が低下し創外固定では強固な固定性は困難であるが、骨密度の比較的保たれている上腕骨頭部の後内側部や骨皮質に支持性を求めることにより固定性を期待できると考えている。

27. Fin 付き髓内釘を用いた足関節固定術の小経験

国立病院岡山医療センター整形外科

有森 勸 中原進之介 田中雅人
竹内一裕 壺内 貢 大野尚徳
越宗幸一郎

今回我々は著明な跛行がみられた慢性関節リウマチ、外傷性距骨壊死の2症例に対し、フィン付き髓内釘を用いた足関節固定術を行った。2例とも術後2週で部分荷重開始とし、順調な骨癒合が得られた。フィン付き髓内釘

を用いた足関節固定術は強固な内固定のため、早期に荷重歩行が可能であり、固定術後の偽関節や外傷性関節症などの軟部組織の状態の悪い症例のサルベージ手術として、また骨萎縮の強い症例に有効な方法と思われた。

28. 当院における壊死性筋膜炎の検討

岡山赤十字病院整形外科

宮本 正 廣岡邦彦 杉山成史
東原信七郎 小西池泰三 那須正義
小野勝之
長尾 洋

同皮膚科

当院において1992年から2002年8月までの間に経験した壊死性筋膜炎8例につき検討した。男性6例、女性2例、平均年齢51.5歳だった。死亡例は3例で死亡率は37.5%だった。基礎疾患は糖尿病が3例と最も多く、C

型肝炎が2例だった。また St. piogenes による3例は全例救命し得たが、vibrio 菌による2例は来院3日以内に死亡し、その重篤性がうかがわれた。

29. 大腿骨転子部骨折に対する髓内固定法

— 日本人高齢者に対する治療成績とその適合性について —

水島中央病院整形外科

前原 孝 藤原紘郎 井上 周
茂山幸雄 光吉五朗

日本人の骨格調査から ¥-, CHY-Nail を開発し、使用している。今回、85才以上の高齢者について、その治療成績とネイルの適合性を検討した。我が国の高齢者には、骨皮質が菲薄化して髓腔が拡大した症例が比較的良好に見

られるが、本ネイルの適合性は良好であった。術後荷重訓練も比較的早期に開始可能であり、成績は概ね良好であった。¥-, CHY-Nail は日本人高齢者の骨格によく適合し、その治療成績も良好であった。

30. 脊椎に発生した類骨骨腫の1例

岡山大学大学院医歯学総合研究科機能再生・再建科学

菊地 剛 尾崎敏文 藤原一夫
井上 一

症例は15歳男性。2000年2月より背部痛出現し、8月当科初診。以後、外来で経過を見ていたが、2002年7月、当科入院となる。入院時、第10胸椎周囲に叩打痛、圧痛を認めた。レントゲンで Cobb 角13°の側彎を認めた。骨

シンチ、CT、MRI から類骨骨腫と診断し、左下関節突起切除、骨移植を行った。術後の病理組織では nidus が見られ、類骨骨腫と診断された。術後のレントゲンでは Cobb 角8°と側彎の改善が見られた。